

# 中国五十年代前半の連環画政策と旧通俗小説

石 井 恵美子

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第1巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 1/No.1

平成16年11月30日発行      November 30, 2004

# 中国五十年代前半の連環画政策と旧通俗小説

石井恵美子\*

## 1 はじめに

中華人民共和国は1949年に成立した。それ以後、様々な文学史が編まれてきたが、残念なことに十数年前までは、大衆的な、武侠、恋愛などのいわゆる通俗小説について紙幅が割かれることはほとんどなかったといっている。鴛鴦蝴蝶派といわれる49年以前の通俗小説が見直されてきたのは最近である。近年編纂された文学史、たとえば程光焯編『中国現代文学史』（中国人民大学出版社、2000年）、王文英編『上海現代文学史』（上海人民出版社、1999年）、武潤婷『中国近代小説演變史』（山東人民出版社、2000年）などでは、かなりの紙幅を割いて鴛鴦蝴蝶派の通俗小説を扱っているが、やはり近現代に限られており、49年以降に触れるものは少ない。湯哲声は「通俗小説は1949年以後中国大陸で消えてしまったが、外部の社会及びイデオロギーがいささかゆるめられると、それらは粘り強く姿を現すようになる、それがつまり80年代初めに中国通俗小説が一気に復活した大きな原因であろう」と述べ<sup>1</sup>、また、陳思和編『中国当代文学史教程』は「50年代以降、もともと通俗文学の領域にあった恋愛（言情）<sup>2</sup>、武侠、鬼怪の小説は均しく取締を受け、この閲読空間を実際に埋めたのは、『林海雪原』の類の読み物だった」<sup>3</sup>という。このように、通俗小説が消えてしまった、なくなったという記述には出会うものの、その消失がどのように進んでいったのかに触れたものはみかけない。そこで、本論では49年以前の通俗小説が、建国後にどう評価されていたのか、消失したのか、したとすればどのような過程を経たのかについて、『人民日報』『文芸報』などの新聞雑誌を中心に検証していく。文中、49年以前の通俗小説、連環画はそれぞれ「旧通俗小説」「旧連環画」とした。

旧通俗小説に対する政策方針がもっとも顕著にあらわれたのは、連環画の改革キャンペーンだと思われる。そのため、本論ではまずこの時期の連環画の評価と取り扱いについて述べる。それから多くの読者を擁していた貸本屋と旧連環画、旧通俗小説の関係、及びその後の旧通俗小説評価についてみていきたい。旧通俗小説に関する記事は、55年を過ぎるとほとんどみられなくなるため、ここでは49年から55年までの期間を主な対象とした。なお、通俗小説といえば、49年以後に書かれた小説との比較も視野に入れなければならないだろうが、それは今後の課題とし、ここでは49年以前に都市で書かれた旧通俗小説の、50年代前半における評価についてのみ取り上げている。また、『人民日報』はCD-ROM版（1946-2000年）を使用した。『文芸報』は期数からでは発行月日がわかりにくい時期があるため、その時期のものには発行月日を括弧内に示した。

## 2 五十年代前半の連環画政策

### 2-1 連環画改革

---

\* 地域学部地域文化学科

本章では、多くの読者を擁していた連環画が、50年前後にどう扱われたかをみていく。その際、読者と連環画をつないでいたのが、露天の書店「書報攤」であるといっていだろう。通俗小説、連環画の出版の中心地だった上海には、49年以前、書報攤が街頭に多くあった。これは決まった場所に出ず露天商のひとつである。韋慧「旧上海街頭的露天職業」より書報攤についてみてみよう。

書報攤の利益の源は、主に各種日報、小報で、その次が雑誌だった。彼らは比較的専門性が強い書籍もいくらかは置いていたが、前者の売れ行きには遠く及ばない。この他に、主に連環画を扱う「小書攤」があり、こちらはたいへん読者が多かった。小中学生と家庭婦人が金を払って借りて読んだ。店主は、手に取るのに便利なように、可動式の書架を屋台とし、興味を持った読者が、本を家に借りていくこともできた。この種の露天の本屋は、上海の路地（原文は弄堂）の入り口に多くみられ……<sup>4</sup>

本を借りても基本的にはその場で読み、家に持ち帰ってもいいのは、常連客だったようだ。蔡豊明『上海都市民俗』<sup>5</sup>は、立て掛けた書架の前で少年が本を読んでいる写真を掲載しているが、その写真の解説文に「陳列していた図書は多くが旧小説で、他のかなりの部分が連環画」とある。また、賈攸「上海弄堂面面觀」によれば、連環画を扱う「小書攤」は、「一枚または数枚の戸板のような棚と、数個の腰掛けがあれば、多くの子供を引きつけることができた。これらの連環画の内容は、多くが旧小説であり、また映画や戯劇のストーリーを改編したものもあり、大人も好んで読み、多くの人が家に借りていって読んだ」<sup>6</sup>という。このような露天の本屋は、本や雑誌を売るものもあったが、貸本の利益が収入のかなりの部分を占めていたようだ。49年前後の貸本屋の状況については3章で述べるが、ここでは、旧通俗小説、旧連環画の多くの読者は貸本で読んでおり、連環画の内容も、旧通俗小説や人気映画をもとにしていたことに注目しておきたい。従って、旧連環画をどう評価するかということは、直接的とはいえないにせよ、旧通俗小説の評価と深く関わっている。

49年に新政府が成立し、日本軍、国民党の統治下に長い間置かれていた上海などの大都市は、共産党政権のもとに入ることになった。文芸政策のひとつとして、49年から51年にかけて第1次、また55年前後に第2次の連環画改革が行われる。またこの2回ほど大がかりではないが、53年にも連環画改革が取り上げられる時期がある。

49年からの第1次連環画改革は、過去に出版されて在庫が残っているものと、出版が予定されていたものに対して、適格かどうかを決定することから始まった。黎明、凌霄「連環図画改造工作—上海通訊」<sup>7</sup>は、49年7月末に連環画の内容を検査したうえで、重大な問題のあるものは焼却処分、いささか問題のあるものは一部を削除するかまたは焼却、としている。この記事は検査を受けた連環画はほとんどが検査を通過し、焼却処分になったのは少ないという。しかし翌号に載った余雷「黄色文化的末路—上海通訊」<sup>8</sup>は「露天商に残されていた良くない書籍は、公安局の取り締まりと禁止を受けて、販売許可も取り消され、多くが焼却された。さらにこれらの書物を印刷した商人に警告した。この種の書物は現在市内でもその跡を絶った」と述べる。余雷の記事は連環画、書籍の取締りがすでに完了したという誤解を与えやすく、また解放前の旧通俗小説すべてが良くないという観点に立つのではあるが、ここからも、これらの小説、連環画の検査が行われ、問題ありとされたものは焼却処分になったことが見て取れる。

焼却処分にならなかったものは引き続き出版し、貸し出してもかまわない。しかし、現実には49

年以後出版された新しい内容の本1冊とそれ以前の旧本2冊を交換するという方法で、入れ替えをはかる方針が出された。「沈陽、上海、杭州等城市対連環図画書攤進行改造工作」<sup>9</sup>は「上海市人民政府新聞出版処は、連環図画書攤改進委員会を通じて、新しい本への交換、補助工作を進めている。方法は二冊の旧連環画と一冊の新連環画を交換するというものである」とし、蘇州では283軒の貸本屋の連環画をすべて交換したという。この方法は後に冊数の1対2交換から、買い取りに変わるものの、55年になっても続けられたようである<sup>10</sup>。この連環画改革は、人民政府文化部の1950年の活動報告と51年の活動計画にもあげられている<sup>11</sup>。

旧連環画はどのようにみられていたのか。耘耕「連環図画的改造問題」<sup>12</sup>は、「旧連環画は大部分が毒のあるものだ。だがその形式は小市民大衆の好むところであり、普及と教育の意義において、我々は適切に、批判的にそれを利用し、一歩進めてそれを向上させ、発展させるべきである」と述べているが、これが旧連環画に対する一般的な認識だったのではないかと思われる。旧作2冊と新作1冊を交換する方法を進める一方で、雑誌、新聞紙上では、旧連環画に対するキャンペーンが展開され、旧連環画ひいては旧通俗小説に対する見方が形作られていった。

## 2-2 連環画に対するキャンペーン

連環画改革の中でやり玉に挙げたのは、ほとんどが恋愛小説、武俠小説を題材としたものだった。前節で述べた49年7月の検査、つまり最初の段階で焼却処分になったのは『宋氏三姉妹』『中国国民革命軍』など五部とあり、非常に少なくまた国民党関連のものであったが、それ以後、キャンペーンの対象となっていくのは、恋愛、武俠題材である。理由のひとつには、新しい題材である労働者、農民を主人公にしたものや解放戦争を舞台にしたものが、50年の時点ではまだ少なかったことがあげられる。新たな作品の少なさはしばしば取り上げられ、創作を奨励されたが、新作が大量に書かれるには時間がかかったようだ。

前掲の49年の耘耕「連環図画的改造問題」は、題材の公式化、創造性の欠如など新作の連環画の抱える問題点を挙げ、「題材の採取が古くからの解放区にあった若干の著名な演劇と小説のストーリーに大部分集中しており、自分で一種の典型を作り出そうとすることはめったにない、その原因は主に迅速に出版したためである」「我々はいまこの時この地の、人民が熟知し、好むものを創作しなければならない」「連環画の作者は都市の狭い部屋に閉じこもって古い解放区の小説をめくりながら創作するのではなく、工場や、農村、部隊に行って創作するのを希望するし、そうせねばならない」と述べる。また50年5月、上海通俗出版業連合書店の編集部は、連環画の編者、画家、出版者を集めて座談会を開き、連環画の題材や描き方の指導をしたようである<sup>13</sup>。効果があがったかどうかは不明だが、53年になっても、「作品はももとの水準に終始留まっている。各省の通俗文芸刊行物は、売れ行きがよくない」「公式化概念化の傾向は依然として広く存在し、思想性芸術性は劣っており、大衆の人気を得られない」<sup>14</sup>といわれている。

一方で旧連環画の人気は衰えていかない。劉徳元「対連環画及其出版者の意見」<sup>15</sup>はこう述べる。

北京市の多くの連環画露天商では、相変わらず大量の封建的武俠的旧連環図画が購入できる。上海にはいまでもいくつかの書局があり、私利を貪ろうとはかり、次々と大量に毒のある旧連環画を出版している。例えば聯益書局が一九五〇年三月に出版した『豪俠太歳刀』。このほか

福記書局、聯華書局、文華書局、太記書局、華大書局、同康書局、美華書局などが最近出版した『七俠五義』『鉄獅王』『濟公小俠』……統計すると、百余種になるかもしれない。

これをみると、50年頃にはまだ旧連環画を出版する書店があったことが分かる。また、55年になっても、次のように書かれており、逆説的に、旧連環画、旧通俗小説の人気のほどがうかがえる。

現在全国の省都以上の都市では貸本屋と貸連環画屋の店舗、露天商は一万以上ある。彼らの手中には、大量の旧社会から残る反動的な、卑猥な、荒唐無稽な旧小説、旧芝居の歌本、旧連環画、旧写真・絵はがきがあり、毎日数十万の読者に貸し出されている<sup>16</sup>。

旧連環画の人気の原因について、白融「奪取旧小人書陣地—北京通訊」<sup>17</sup>ではこう述べる。

大衆が喜ぶのは始まりと終わりがよくわかるストーリーであり、強い物語性が必要だ。旧小人書(連環画…石井注)中の武侠、神怪の類はもっとも人気があるが、これが大きな原因である。一般の新人書は物語性が比較的弱く、連環画という名であるにもかかわらず、絵と絵の間に何の連続性もないものもある。文盲や半文盲の読者には理解しようがない。

白融は新作の連環画を向上させるために、旧連環画が持っていたストーリー展開のわかりやすさが必要だと述べているが、ここにいみじくも表れたように、新連環画は旧連環画のストーリーのおもしろさに追いつけないのでした。そこで、旧連環画の自然消滅を待たず、出版社および貸本屋を取り締まり、強制的に新旧の交代をはかることになったのだと思われる。

連環画改革キャンペーンでは、後半になるほど、旧通俗小説とくに武侠小説の悪影響が叫ばれた。これも旧通俗小説と連環画の密接さを表す例であるといえよう。

たとえば趙鎮南「教師應該指導學生閱讀文芸書籍」<sup>18</sup>は中学教師の意見としてこう述べる。

その子供たちは武侠小説に夢中になった。寝食を忘れて読み、授業中もこっそり読んだことさえある。その結果、彼らは学習で落後し、頭の中は古めかしい奇妙な考えでいっぱいになり、落ち着いて学習できず、学校の制度が嫌になり、教師が彼らの“自由”と“発展”を制限するのを嫌い、“屋根を飛び越え、壁を走る”式の英雄人物になると幻想を抱く。私はこのような学生を見つけると、彼らと個別に話し、悪い本の影響を伝え、よい書籍を紹介した。こうして、悪書を彼らは読まなくなったが、良書も読まない。彼らは「武侠小説を読み慣れていて、こういうのは興味が持てない」という。確かに、児童文学作品のいくつかは無味乾燥で、優れた吸引力がない。

ほかの記事でも、共産主義青年団に参加するほど生産に積極的だった青年が、「武侠小説ファン(原文は迷)」になってからというもの、侠客になることを夢みて革命組織と疎遠になり、生産にも消極的になってしまったという例。また女性労働者が連環画を読んだために、連環画に出てくるような素敵な夫を探そうとして絶望し、自殺未遂をした例などが挙げられている<sup>19</sup>。新しい通俗小説や連環画の普及をめざす記事を掲載すると同時に、このような旧連環画、旧通俗小説の悪影響を示し、批判的なキャンペーンが展開された。

そして反右派闘争を経た 50 年代末には、鴛鴦蝴蝶派の「作品は大半が不健康だが、一定の社会的意義があるものもある」、探偵小説の「特徴は科学上の発明を利用し手練手管を弄し風変わりな冒険ストーリーを作った」<sup>20</sup>「探偵小説は『本当の資産階級の文学』である」、武侠小説は「階級の矛盾を純粋な個人の恨みとし、人民の戦闘と反抗の意志を麻痺させ、迷信思想、因果応報と各種の封建観念を宣伝した」<sup>21</sup>という極端な評価も登場することになった。

### 3 貸本業と読者

#### 3-1 貸本の状況

49 年以後、旧通俗小説は、主に貸本で読まれていたようだ。50 年当時の北京の貸本屋の状況について、前掲の「奪取旧小人書陣地」は次のように紹介している。少し長いが引用する。

北京市第九及び第十二両区では、三十個の小人書の露天商があり、書籍の少ないものは三、四十冊、多いものは三百冊余りである。固定した屋台もあれば、移動式のものもあり、「東が良くなければ西に行く」。少数だが専業でないもの、煙草屋や軽食屋に付設したものもある。商売の状況は季節によっていくらか異なり、五月から九月がもっとも良く、大風や雨の時は商売にならない。現在の状況では、最も少なくて借り賃が一、二千元、もっとも良いもので一万五、六千元、普通のは四、五千元である。どの本も一回の借り賃は百から二百円で、従って、この三十個の露天商では、平均して毎日一千冊以上の本を借りてもらわなければならない。二十万人口の第九、十二両区で、これは驚くべき比率であり、どんな文化館もこの数字には到達できないだろう。読む人の構成は、子供が総数の六、七割を占め、そのうちでは失学児童が大部分を占める。成人では、文盲あるいは半文盲の労働人民が最も多く、屋台で本を読む時間のない店員や露天商人は、家に借りていって読む。この方式をとるのは家庭婦人が多い。家庭婦人が読む本は、映画のストーリーが多い。彼女たちは映画を見る金がないからだ。ある店主がうまいことを言った。「一、二百元払って家で映画を見てるのさ。」彼らの書籍のおおかたは琉璃廠の自強書局と打磨廠の学古堂から購入する。比較してみると、小人書の商売は以前ほどよくない。一方で各小学校に新小人書が置かれ、一部の読者を取っていった。もう一方で、ある店主が言っていたように「解放後、多くの人が夜間学校に行き、理屈がわかるようになり、こういった神仏妖怪なんてものを信じなくなった」からである。だが、新しい本は数も少なく、旧小人書に比べ、読者が少ない。

このように連環画の貸本は、49 年以前と同じく小さな露天商で扱われていたようである。貸本の値段が高いようなのはインフレの時期だったためだと思われるがはっきりしない。

また「談説北京租書攤」<sup>22</sup>は、同じく 50 年当時、小説など書籍の貸本屋についてこう述べている。

北京市の貸本露天商は歴史が長くない。近年読者の購買力が低下して、次第に起こってきたのかもしれない。……現在全市でおそらく八、九十軒が、どうにか生活を維持している。この種の露天商はおもに封建、迷信、荒唐無稽、神怪、淫蕩、退廃的武侠小説や言情小説を貸し出

し、部分的には水滸伝、紅樓夢の類の旧小説もある。少数のところでは二、三冊の巴金、老舎の小説もある。だいたいの商売は、往々にして数千冊、少なくとも数百から千冊になる。……解放前、本を借りる人は労働者、大、中学生、商人、公務員、教員、一般の住人が多かった。武侠を読む人は言情を読む人より多く、……長期貸しと臨時貸しがあり、長期貸しは手付け金を払い、本を読みながら精算する。臨時貸しは一冊借りるとき、一冊分に相当する手付け金を先に払い、返すときに一割の貸し賃を差し引く。

小説の貸本屋は連環画に比べると、衰退が激しかったのか、北京だけが軒数が少ないのかはわからない。借りる層は小説のほうが大人や教育を受けたことがある人が多いのは当然だろう。数多く貸さなければ商売が成り立たないのは共通している。

では、貸し出し状況はどうだったのか。同じく「談説北京租書攤」にはこうある。

ある貸本屋の去年十一月十六日から今年二月二十四日の三ヶ月の統計がある。……読者の借り出し状況は、武侠小説が第一で、あわせて 1859 冊。その中で鄭證因が 669 冊、還珠楼主が 644 冊、王度盧が 208 冊、宮白羽が 176 冊、朱貞木が 162 冊。言情小説はあわせて 432 冊。その中で劉雲若が 303 冊、馮玉奇が 69 冊、張恨水が 60 冊。そのほか各書籍は 672 冊。

この貸本屋は「進歩的」だと紹介されている。「そのほかの書籍 672 冊」は五四以来の新文芸小説、解放区の文芸小説、児童読み物、政治常識の類を指すが、そのうち解放区の文芸小説は 52 冊である。これらの新しい題材の小説もあるにはあるが、数は少なく、圧倒的に武侠、言情小説の貸し出しが多い。

また前掲「堅決地処理反動、淫穢、荒誕的凶書」に書かれた「店舗、露天商は一万以上」あり旧小説、旧連環画が「毎日数十万の読者に貸し出されている」という文は、55 年になっても、旧通俗小説を扱う貸本屋が多かったことを示している。

50 年前後は国営の新華書店がまだ非常に少なく、50 年「六月末の統計で、全国の支店はちょうど一千」、私営の出版業者は業務を縮小しつつあるとはいえ、私営業者と国営出版機関が協力しないと出版の普及をはかるのは困難<sup>23</sup>といわれた。政府としては新華書店を早く整備し、私営の出版社や書店の力を減少させたいと思っても、建国後一年余りではそれもままならない。商務印書館、中華書局といった大手の出版社とは提携しやすかっただろうが、連環画を出版、販売、または貸し出していったような小書店がもつ旧通俗小説、旧連環画は、発見しては取り締まるを繰り返す、把握が難しかったのかもしれない。『文芸報』『人民日報』『文芸月報』の他の記事では、全体的な統計が載った記事はみられるが、上記の「談説北京租書攤」のような、個々の貸本屋についての統計はみられなかった。

### 3-2 貸本の読者

連環画、貸本の読者は、児童、学生、労働者、小市民といわれる<sup>24</sup>。2 章で述べた連環画の悪影響の記事にも、学生、労働者への影響が上げられている。中でも武侠小説に関する影響がクロージアアップされるようである。その際みたように、記事では労働に不熱心になる、学業に支障をき

たず、妄想の世界に入ってしまうといった悪影響が強調され、そこからどのように抜け出て、積極的な生活に戻ったかが焦点となる。

しかし、学生や労働者がなぜ旧通俗小説を好むのか、耽溺するようになるのかについては、小説そのものに悪い要因があると書かれることが多く、そのため貸し出し禁止に向かうことになる。

その中で、都市の読者の旧通俗小説に対する思いを紹介したのは、「談説北京租書攤」、丁玲「跨到新的時代来—談知識分子的旧興趣与工農兵文芸」<sup>25</sup>など、一部の記事である。

「談説北京租書攤」は、貸本の読者は「生活、家庭などの個人的問題により、苦悶がある、精神上で刺激を求めている、またはすることがなく、暇つぶしを求めて、そのため刺激があつて憂いを解く小説を借りるのだ」と述べるが、これは貸本や連環画についての文章でよくみられる見解である。さらに解放区の小説は「いいことはいいが、みな人を教育する。私たちが小説を読むのは憂いを解くため、人を教育する作品は読めない」という読者の意見を紹介している。

「跨到新的時代来」では、読者の手紙にみられる意見をまとめたものとして、以下のような理由を載せている。

1、労働者、農民、兵士を描いた書物は……単調で、粗雑で、芸術性に乏しい。これらの本は読んでもわからないし、おもしろくない。主題が狭すぎて、重複しており、毎日毎日労働者で、頭が痛くなる。……2、彼らは巴金の書、馮玉奇の書、張恨水の書、『刀光劍影』の連環画がすきだ。翻訳の古典文学が好きな人たちもいる。3、小資産階級知識分子の苦悶を描いてほしい、知識分子典型的の英雄を描いてほしい、解放戦争中の諷刺を上げる、泣ける物語を書いてほしい。知識分子改造の実例を書いてほしい、あるいは資産階級を物語の中心人物にしてほしい、または都市の小市民生活を描いた作品がほしい。

これらの理由を挙げた上で「跨到新的時代来」は、労働者を描く作品に共感できないのは、都市の読者の心情に理由があるとし、人民大衆の生活を知らない、閉鎖的な「芸術」を楽しむ個人的心情に親しんできた、起伏のある物語で時間をつぶしたいといったその心情を代弁する。そしてこの状況を克服する手段として、作者が「巴金、馮玉奇、張恨水の方法で、革命的ロマンスを書く」こと、一方で読者は、巴金の小説の登場人物が家を出た後革命に参加したと仮定し、「部隊に行き、農村に行き、工場に行き、幹部になったと仮定してみよう。これらの人たちが実生活中でどのように鍛錬されたかをみてみよう」という読み方が必要だとして、作者と読者の双方に変化が必要であることを提唱するのである。

「跨到新的時代来」が、労働者を描く小説の主題が狭すぎる、どれを読んでも変化がないという読者の意見を採り上げたのは興味深い。また読者について「これらの人々は原則的に労働者の文芸方向に反対していない。だがこれらの戦闘的で政治の雰囲気濃厚な、自分の生活や興味とは距離のある、しかし市場で一日また一日と勢力を増す本に対して、深く反感を抱いている」と、労働者を描く本が増えていく都市の状況と読者のとまどう心情に一步踏み込んだ意見を述べており、他の文章と一線を画している。全体的にみれば、連環画改革や労働者主体の文学に異論を唱えているわけではなく、新しい小説の質の向上によって読者を変化させようという意図がみえる。だが、丁玲のこの文章は他のものに比べ、都市の読者の複雑さに目を向け、読者の心情に添いながら、変化を促す方向を探っている。上記の引用部にある読者の要望のうち、解放戦争や知識分子改造以外のテーマは実現できるとは思えない。だが、それを敢えて挙げ、批判を加えずに、実情として示した。



読者の意識変化には長い時間が必要なことを示したといえるだろう。

だが、これは都市部の読者だけの心情だったのだろうか。57年の「通俗文芸作家的呼声」<sup>26</sup>で、苗培時は、農村部で出会ったこととして、「解放後いくつか鉱山にいったが、鉱山労働者は仕事が終わると連れだって町に行き……老先生が一字も変えずにつかえながら『彭公案』『施公案』『七侠五義』をうなっていた」と49年以前とまったく変わらない語り物の実情をあげ、大衆が聞きたい見たいと思っているものをどうして提供しないのかと述べている。教育的要素を多分に持ち、新文学の代表的存在といわれた趙樹理の小説がユーモラスな描写を重視したことを考えても、娯楽的要素を小説や連環画に求める傾向は、本来、都市部だけのものとはいえない。

「談説北京租書攤」の、小説は「憂いを解く」ために読むのであって「教育する」小説は読みたくない、という意見は、当時推進された農村を描く新たな小説の主流とまったく逆方向にある。もともと文字を読む読者というものが少なかった農村では、第一に普及が叫ばれていった。人民解放軍の文芸政策も、識字教育や小説を演劇に脚色して広めることと、従来深いつながりがあった。農村、農民を中心に置いて描き、わかりやすいことを第一に心がけ、革命に結びつく教育的内容を盛り込む。それらは農村の現在ある問題を扱い、解決の手がかりを与え、直接役に立つものとなる。労働者や農民を描き、新生活を描く題材は、それを目指していたといえよう。しかし、役に立つ面が強調され、小説のもつ娯楽的要素、憂いを晴らす要素を顧みず、教育、改革の手段として位置づけたことが、当時都市部だけでなく、農村部でも旧通俗小説や語り物が歓迎される実情につながっていったのではないだろうか。新文学において、それをある程度解消するには、『紅岩』『林海雪原』など、解放戦争期を舞台にしつつ冒険的要素も持ち合わせた、50年代後半からの長編小説ブームを待たねばならなかった。

### 3-3 旧通俗小説作家の待遇

旧通俗小説の作家について、49、50年の『文芸報』は次のような記事を掲載している。

過去、新聞経営者は新聞の売り上げを伸ばすため、あるいは計画的にわざと人民に毒気を与えようとして、小市民の趣味に合わせるために、これらの作者に猥褻な小説を書くよう要求した。作者たちの政治認識はあいまいで、生活のために書いていたのだ<sup>27</sup>。

武俠、言情小説の作者に対し、手だてを講じて援助しなければならない。北京市大衆文芸創作研究会がいくらかの人に仕事を紹介したことがあるが、彼らの思想の進歩と創作の改造についても、具体的援助が行われた。しかしまだ少数の作者が、こうした小説を書いても前途がないと認識し、進歩したいと思っても、生活問題が解決しないために、相変わらず無理して書き、一日平均一万字ほども書いても、生活を維持するのは難しい（本の値段は安く、原稿料は少なく、書店の搾取は重い）<sup>28</sup>。このような人は数が少ないし、解決もとても困難というわけではない。文教機関と文芸工作者の注目を望む<sup>29</sup>。

この頃、旧通俗小説の作家に対し、一方で工場や農村に生活体験に行き、実際に体験したことを題材にするよう要求が出され、もう一方で待遇の保障が問題になっていた。原稿料については、こ

の頃の『文芸報』などには出てこない。だが、57年の「通俗文芸作家的呼声」には原稿料とノルマ冊数についても触れられている。これは57年5月22日、通俗文芸出版社が通俗文芸作家を招いて開いた座談会の記録である。参加者は陳慎言、張友鸞、張恨水、李紅（還珠楼主）、王垂平、苗培時、金受申、金寄水など20人、結果的に、反右派闘争開始直前の座談会となった。この中で張恨水は、通俗小説作家は作品が出版されたとしてもノルマが非常に厳しいといい、自分には少なくとも7万冊のノルマが課せられる、『白蛇伝』は10万冊売れないと原稿料が受け取れなかったと述べている。張友鸞は、「章回小説の原稿料は一千字でわずか五、七元だが、ノルマは十数万（冊）だ、これは労働に応じて報酬を得る原則にみあっていない」「章回小説作家は一晩で数十万字書けるわけでは決してない」「多くの人が章回小説は容易に書ける、歴史題材は容易に編めるから、労働が少ない」と考えているという。舒蕪は「原稿料が低くて、ノルマが多いのは、出版社をとがめることはできない、行政部門つまり出版局に責任があると考えている。……彼らは作家は収入が少ない方がいい、多いとすぐ腐敗墮落するという指導思想なのだ」と述べた。

張恨水は通俗小説の作品（彼のいう章回小説）、作家の評価の低さを改善してほしいと各所で要望していた<sup>30</sup>。その中のひとつ「章回小説為何遭遇輕視」では、文壇に章回小説を輕視する傾向は49年以前にもあったがそれは「個人の輕視に属するものだったし、章回体の小説はそれでも流行していた。だがここ十年来、徹底した輕視に遭い、新聞雑誌上では、章回小説の欄もなく、章回小説を語ることにすら輕蔑される。文学書籍は、完全に章回小説の部門を削ってしまった」と述べている。作家協会理事、文化部顧問など要職についていた張恨水は、他の旧通俗小説作家と比べ別格といえるが、しかし、別格であったからこそ要望も直接発言できたわけであり、他の作家の発言は「通俗文芸作家的呼声」以外にあまりみられない。上に挙げたほかにも、作家協会は通俗文芸出版社を輕視しており、会議に呼ばない、趙樹理等の個人的応援はあるものの、通俗文芸出版社には人民文学出版社のような支援がない、解放後の生活を書きたいと思っても出版してくれるところを探すのが困難、書いても即座に批判を受けるなどが、意見として出ている。

ここから、旧通俗小説作家はまったく創作できなかったわけではないが、作品の発表、出版が困難だった、出版するとなると過大なノルマが課されたらしい、原稿料が少なかった<sup>31</sup>、そして何よりも輕視され屈辱を感じるという境遇にあったと推察できる。また、この直後に起こった反右派闘争がさらに状態を悪化させた。陸文夫は「心香一瓣」において、57年百花齊放時期に開催された出版社主催の座談会で、「程小青先生の選集を出版するよう力説した。……当時、皆も興味を持ち、また三、五十万冊は問題なく売れるだろうと考えた。思いがけず、すぐに反右派闘争になり、本は出版できなかつたし、私は反党集団分子になってしまい、程先生の本を出そうとしたことも私の罪状のひとつになった」<sup>32</sup>と述べている。

#### 4 探偵小説とアメリカ批判

以上、述べてきたのは主として、武侠、言情小説についてである。探偵小説も当然のことながら、旧通俗小説の範囲に含まれる。しかし探偵小説に関連するものは、連環画改革関連の記事ではほとんどみられなかった。目にしたのは、連環画ではないが、3章でみた「跨到新的時代來」が「知識分子にはゴリーキーや魯迅を好み、比較的進歩的な作品を好む人もおり、『霍桑偵探案』または『金粉世家』だけを好む人もいる。革命的なものもあれば、墮落したものもいるのだ」と程小青の『霍

桑偵探案』を墮落した側に挙げています。これを見ても、決して評価が高かったとはいえないが、『文芸報』誌上で、探偵小説の作品名が挙げたのはこれだけであり、言情、武俠小説のように多くはない。ただ『人民日報』では、55年に「読者は、ほかにも追いはぎ、誘拐、窃盗、荒唐奇異、血腥い恐怖を主題とする反動的『探偵』、『科学』小説が、反動統治階級と帝国主義の虐殺、略奪思想をまき散らしていると指摘する。反動統治階級はしばしばこれによって殺人犯、特務、スパイを集め、革命事業を破壊するのであり、これもまた我々の注意を強く引かないわけにはいかない」という記述がある<sup>33</sup>。これは国内の「多くの都市の書店や露天商で貸し出される」書刊についての読者の投書となっており、旧探偵小説の地位がやはり低かったことを示しているだろう。

だが、探偵小説の低評価には武俠、言情小説とはまた別の要素が関係していたと思われる。それはアメリカ批判である。

以下、『人民日報』からアメリカ批判と探偵小説が関係する記事を挙げる。

彼ら（アメリカ帝国主義者と金儲けを企む帝国主義者…石井注）は、全世界はニューヨークによって支配され、全世界はアメリカ人のように飲み食い遊ぶべきだと考えている。すべての映画館でアメリカの作品だけを、すべての劇場でアメリカの色情狂の作品だけを上演する。すべての書店ではアメリカの探偵小説だけを売り……<sup>34</sup>

アメリカでは毎年二百五十種の新しい探偵小説が出版され、ほかにほぼ同量の既存のこの種の小説が重版される。これらの探偵小説の出版量は百万冊にのぼる。色とりどりの耐え難いほど俗っぽい表紙には、血まみれの死体でなければ、武装した強盗があり、いつでもどこでもアメリカ人の身边から離れない。……アメリカのすべての反動“文芸”は、一般のアメリカ人を悪が栄えるという気分の中に抑圧する<sup>35</sup>。

アメリカの探偵映画は虚偽の冒険行為を借り、わざと現実離れたストーリーを配して悪事悪行に誘い、人民を麻痺させ青年を害し、反動階級の統治に利するようになる。過去の中国の武俠映画も封建的迷信のものを宣伝していた<sup>36</sup>。

アメリカとの冷戦を反映したソ連の論調をそのまま載せたことに加え、50年前後は朝鮮戦争で中国がアメリカと敵対していたこともあり、アメリカ批判が新聞雑誌で急増する。その批判の文章で、時にアメリカ的な文化の典型として登場するのが、探偵小説やハリウッドの冒険映画、サスペンス映画であり、それらの「残忍な」「現実離れた」内容がアメリカ国民の心をむしばんでいるという論調である。旧通俗小説の範疇に入っているだけでなく、こうしたアメリカ批判に実例としてあがるのが、探偵小説の評価を低くしていったと思われる。

だが、そのために「探偵的な」小説が消えてしまったわけではない。「資本主義的な私立探偵」を主人公とする探偵小説はなくなったが、冒険や推理を中心とする小説はなくならなかった。ソ連の推理、冒険を描いた小説が、50年代半ばに大量に輸入され<sup>37</sup>、国内でもこの種の小説が出版される。それらは冒険小説または驚険小説と呼ばれた。「驚険」はスリルのある、冒険的などという意味をもつ。冒険小説、サスペンス小説、スリラー小説と訳せるだろう。驚険小説の主人公は警察官、公安局職員、国境警備隊などの組織に属する人物である<sup>38</sup>。警察の組織が謎を解き明かし、事件を解決するストーリーであり、社会主義中国の体制転覆を謀る陰謀を未然に防ぐという内容が多い。

これら中国の驚険小説の内容については、また稿を改めて書きたいと思うが、総じて事件は単純で迫力に欠け、謎解きのおもしろさはあまり期待できない。

このように、当時の中国は「私立探偵的」探偵小説をアメリカ批判に関連づけて否定した後、「驚険小説」と名称を変え、ソ連に影響を受けた推理、冒険を描く小説を受け入れていったといえるが、その際、私立探偵などの個性的な主人公、娯楽としての謎解き、奇想天外な着想という旧探偵小説が持っていた特徴を失っていき、かわりに組織で働く主人公を登場させ、謎解きよりも冒険にその特徴を移していったと思われる。

## 5 おわりに

以上、50年代前半に、旧通俗小説がどのように扱われていったかについて、連環画改革の記事を中心に考察してきた。旧通俗小説は連環画改革にあらわれたように、中華人民共和国の文芸政策により、荒唐無稽、色情的、青少年に悪影響を与えるとして低い評価を受けた。人民教育を文学の中心に据えた文芸政策は、旧通俗小説の持つ娯楽的要素を排除し、新生活を題材とした通俗小説、連環画を推進させようとしたが、50年代前半、繰り返し旧通俗小説、旧連環画の取り締まりが行われているように、その試みは期待したほど進まなかったと考えられる。ひとつには、新しい題材を描ける作家が不足していたことと、旧通俗小説作家が新しい題材を描こうとしてもすぐに批判に遭い、発表する機会を失ったことである。旧通俗小説作家が新たな生活体験を積むのを、長い目で見守ることができず、彼らの持つ、読者を惹きつけ、起伏のある物語を作り出す技量を新しい体制に生かすに至らなかった。

また、それよりも大きな原因として、娯楽的要素の排除があるだろう。本論では、都市部の読者の反応を取り上げ、気楽に読めて憂いを晴らすという読書におけるカタルシスが、批評する側に顧みられなかったことを述べた。俗悪な書物を読む読者の精神に問題がある、読者の精神に悪影響をもたらす書物をなくそう、という主張は、なぜ読者がそのような書物を必要とするかについて、重視することはなかった。新しい小説、連環画の普及推進をはかるとき、理想的な読者が設定されたのではないだろうか。新たな読者は娯楽的要素を排し、人民教育に重点をおいた農村改革小説に積極的に反応すると仮定されたように思われる。娯楽的要素はしかしまったく排除するのは無理であり、それが取り締まりとキャンペーンを繰り返しても旧通俗小説がなかなか減少しないという現象にあらわれたといえるだろう。その結果、50年代後半から60年代初めにかけて、解放戦争時期の実話を標榜した長編小説群により冒険などの娯楽的要素が復活し、それが娯楽を求める読者の期待に合致したと、私は「はじめに」で挙げた陳思和『中国当代文学史教程』と同じように考えている。

探偵小説については詳しく述べられなかった。連環画改革の主眼は何といても武俠小説が第一であり、荒唐無稽、迷信的という批判は、主に武俠小説、次に言情小説に向けられた。探偵小説については、連環画改革や貸本業問題から推し量るのは難しかった。4章で、アメリカ批判との関連を取り上げたが、まだ不十分であり、今後、他の要因も考慮しつつ、論じたいと考えている。

## 注

- 1 湯哲声『中国現代通俗小説流変史』（重慶出版社、1999年）
- 2 原文は言情小説。人情を描く中でも恋愛がほとんどであるため、恋愛小説と訳した。本文の引用では、原文通り言情小説としている。
- 3 陳思和編『中国当代文学史教程』（復旦大学出版社、1999年）
- 4 韋慧「旧上海街頭の露天職業」（湯偉康編『上海軼事』上海文化出版社、1987年）
- 5 蔡豊明『上海都市民俗』（学林出版社、2001年）
- 6 賈攸「上海弄堂面面觀」（湯偉康編『上海軼事』）
- 7 黎明、凌霄「連環図画改造工作—上海通訊」（『文芸報』1巻6期（1949年12月10日））
- 8 余雷「黄色文化的末路—上海通訊」（『文芸報』1巻7期（1949年12月25日））
- 9 「沈陽、上海、杭州等城市対連環図画書攤進行改造工作」（『人民日報』1951年4月22日）
- 10 「堅決地处理反動、淫穢、荒誕的図書」（『人民日報』1955年7月27日）
- 11 「中央人民政府文化部 一九五零年全国文化芸術工作報告与一九五一年計劃要点」（『人民日報』1951年5月8日）
- 12 耘耕「連環図画の改造問題」（『文芸報』1巻5期（1949年11月25日））
- 13 「怎樣改進新連環画」（『文芸報』2巻9期（1950年7月25日））
- 14 天明「為什麼停滯不前」（『文芸月報』1953年7月号）
- 15 劉徳元「対連環画及其出版者の意見」（『文芸報』3巻5期（1950年12月25日））
- 16 「堅決地处理反動、淫穢、荒誕的図書」（『人民日報』1955年7月27日）
- 17 白融「奪取旧小人書陣地—北京通訊」（『文芸報』2巻4期（1950年5月10日））
- 18 趙鎮南「教師應該指導學生閱讀文芸書籍」（『人民日報』1953年8月18日）
- 19 いずれも直言「根絶黄色書刊対青年工人的毒害」（『文芸報』1955年14期（7月30日））にある例。
- 20 北京大学中文系専門化1955年級集体編『中国文学史』（人民文学出版社1959年修改本）（魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料・上』（上海文芸出版社、1984年）所収）。
- 21 復旦大学中文系1956年級中国近代文学史編写小組編『中国近代文学史稿』（中華書局、1960年）（魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料・上』所収）。
- 22 康濯「談説北京租書攤—北京通訊」（『文芸報』2巻4期（1950年5月10日））
- 23 王克浪「出版事業与普及問題」（『文芸報』2巻10期（1950年8月10日））
- 24 黎明、凌霄「連環図画改造工作—上海通訊」などによる。
- 25 丁玲「跨到新的時代来—談知識分子的旧興趣与工农兵文芸」（『文芸報』2巻11期（1950年8月25日））
- 26 「通俗文芸作家的呼声」（『文芸報』1957年10期（6月9日））
- 27 「争取小市民層的讀者」（『文芸報』1949年1巻1期（9月25日））
- 28 （ ）は原文のまま。
- 29 「談説北京租書攤」
- 30 「通俗文芸作家的呼声」のほか、張恨水「章回小説為何遭遇輕視」（『文芸報』1957年4期）、「作協在整風中広開言路」（『文芸報』1957年7期）、「作家協會党組聽取非党作家的批評」（『人民日報』1957年5月23日）など。
- 31 原稿料は旧通俗小説作家だけが少なかったのかどうかは不明。
- 32 陸文夫「心香一瓣」（程小青著『霍桑探案集(1)-(5)』、群衆出版社、1997年）に所収。程小青は49年

以前に私立探偵霍桑が主人公の探偵小説を多数発表し、好評を博した、中国探偵小説の第一人者である。程小青の経歴、作品については、赤羽陽子「探偵霍桑における愛国の語り—程小青「霍桑シリーズ」における正義と愛国」（中国文芸研究会編『野草』72号、2003年）が詳しい。

33 「嚴厲取締反動、荒誕、淫穢的書刊」（『人民日報』1955年5月15日）

34 「西蒙諾夫向上海青年学生界的演説」（『人民日報』1949年10月19日）

35 奥・莫憲斯基「毒害意識的美国“文学”」（『人民日報』1950年10月29日）

36 袁文殊「評影片“智取華山”」（『人民日報』1954年1月9日）

37 「中訳蘇聯文芸書籍大量出版」（『人民日報』1955年11月7日）。他にも、「天津出版大批通俗讀物」（『人民日報』1955年8月22日）に同様の記述がある。

38 たとえば、陸石、文達『双鈴馬蹄表』（北京中国青年出版社、1955年11月）、白樺「無鈴的馬幫」（『猎人的姑娘』北京中国青年出版社、1955年所収）など。